

中東呼吸器症候群 MERS (Middle East Respiratory Syndrome) =マーズ

本日の報道では、この3日ほど韓国での患者さんの増加はないとの事ですが、まだまだ油断できません。

これまでの経緯から、MERS 関連の情報をお知らせします。下記は6月29日付の情報をまとめてみました。

①MERS について

中東呼吸器症候群 (MERS =マーズ) という感染症の患者が韓国で初めて確認されて1カ月以上たった。同国内の感染者は180人、死者は30人をそれぞれ超えた。

日本と韓国の間には年間約500万人の往来があるが、訪韓や来日をむやみに恐れる必要はない。感染力はインフルエンザより弱い。韓国でも院内感染が中心で、街中で広がるような状況ではない。世界保健機関 (WHO) は「いかなる渡航・貿易に対する制限も勧告しない」としている。

日本で患者が発生しても冷静に対処できるよう韓国の教訓を学び、備えたい。

MERSは新型のコロナウイルスが引き起こす。3年前にサウジアラビアで感染した人が報告されて以降、アラビア半島を中心に感染が広がった。ラクダが有力な感染源と考えられている。

2～14日の潜伏期間を経て、熱やせきが出て急速に肺炎が進行する。ワクチンや特效薬はない。高齢者や慢性疾患のある人が重症化しやすく、死亡例の9割は持病のある人との報告がある。十分な配慮が必要だ。

②韓国での拡大

韓国で最初に感染確認された男性は、中東の数カ国を訪れた後に発症した。ソウルや近郊の病院で治療を受け、医療従事者や看病した家族らに感染が広がった。

朴槿恵 (パククネ) 大統領は先週、「韓国が初めて経験する感染症で備えが足りなかった」と述べた。初期対応には多くの問題点が指摘される。

政府が「感染者と2メートル以内で1時間以上接触した人」という画一的な隔離基準を示したため、これに当てはまらない感染者が各地の病院で受診し院内感染が起きた。感染者が出た病院名が公表されず、多くの人が危機感を持たずに病院を訪れ、感染拡大を招いた。

病院側の危機管理も甘く、感染した医師が勤務を続けていたケースもあった。患者が早期回復を求めて複数の病院を渡り歩く、親類や知人の見舞いを頻繁に行う。こんな韓国の医療習慣も院内感染拡大に拍車をかけたようだ。

③日本での対応

厚生労働省や長野県は、渡航歴があり、疑わしい症状が出ている場合、直接、受診せず、保健所や医療機関に連絡するよう求めている。感染防止態勢が整っている指定医療機関で治療するためだ。

マスクの着用や手洗い、うがいの励行といった自らを守る対策とともに、感染を広げないことを心掛けたい。